

523) 天気予報

午前9時には雨が上がるという天気予報を信じて、霧雨が降っていたけれど傘を持たずに出てきたのでありますが、地下鉄を下りて地上に出てきた途端に雨足が急に強くなってきました。蕎麦屋の軒先に入って信号が変わるまで雨宿りと思っていると、幸運にも関連会社の鈴木さんが傘をさしてやって来るではありませんか。もっけの幸いとばかり、「おはよう。会社の近くまで入れてって。」と強引に傘の中に飛び込んで歩き始めると、「本降りになっちゃいましたねー。」という鈴木さんのハスキーな声は、いつもの鈴木さんの声とは質が違うのであります。風でも引いたのかなーと思って鈴木さんの顔を見ると、これが何と鈴木さんに横顔は確かによく似ているけれど、人違いなのであります。しかし今さら「スママセン、人違いでした。」とも言えないから、覚悟を決めて、「いやァー天気予報では9時には雨は上がると言ってたんですよねー。それで傘を持たずに出てきたんですけど。すっかり裏切られましたねー。」

「そういえば昨日の夜も夕方から雨になるというから、傘を持って出たんですけど、結局深夜になるまで雨は降らずに一度も使わなかったですねー。」向こうも結構調子よく話をあわせてくれた。いやしかし会社に着くまでのほんの数分間の緊張したこと。もうほとんど硬直状態で一時はどうなるかと思ったけど、何とか無事に会社までたどり着いたのであります。バッカヤロー！天気予報が悪いってんだ～。